博学博多

ふくおか深発見 保存版

VOL.169

アイデアマン 田中諭吉

次々と飛び出す驚天のアイデア "光頭無毛文化財" 企画の鉄人

梅香る中、みやびな平安の世界が繰り広げられる太宰府天満宮（福岡県太宰府市）の「曲水の宴」が近づいた。王朝絵巻さながらのこの行事の陰にはある男のひらめきがあった。博多祇園山笠の集団山見せや櫛田神社の常設の飾り山笠、同神社の節分の大おたふく面を提案したのも同じ男・田中諭吉である。卓越した発想力と行動力で多種多様な企画を実現。その多くは福博の街の文化的財産として受け継がれている。戦後から高度成長期にかけ、街に元気を吹き込んだ希代のアイデアマン、田中諭吉とは。

新天町商店街誕生の功労者

田中諭吉は1901（明治34）年、博多・川端の焼き物店の長男として誕生。16歳のとき、父親が他界したため生計が苦しく、満足に学校へ通えなかった。学業を諦め、もともと絵を描くのが好きだったので家業を画廊に変え、独学で書画を習得。27歳のときに福岡日日新聞社（西日本新聞社の前身）に入社し編集局絵画班に籍を置く。その後、広告や事業の部門に移り、水を得た魚のように企画人生へと泳ぎだした。

戦時中の42（昭和17）年には、「大東亜建設博覧会」という大掛かりな企画事業を担当している。会場は未開だった百道の松原跡（福岡市早良区）の空き地に諭吉が目を付け、影響下にあった周辺国の展示館を建設。大変な人出を呼んだ。同博は西新町発展へのターニングポイントになった。

終戦直後の45年、西日本新聞社の「戦後対策本部」にいた諭吉は、現在の西鉄福岡（天神）駅の西側を中心とするがれきの山の広大な空き地に発生した闇市場の解消と治安の安定を目的とし、商店街建設の企画書を作成。GHQの福岡軍政部司令官を訪ね、熱意で事業の許可を得た。しかも、当時は珍しかったブルドーザーの出動を要請し、米軍が2台を2日間派遣して、がれきを片付けた。こうして生まれたのが現在の新天町商店街である。

諭吉たちの頑張りで誕生した新天町商店街(1947年ごろ)

ユーモアと強い意志の両輪で

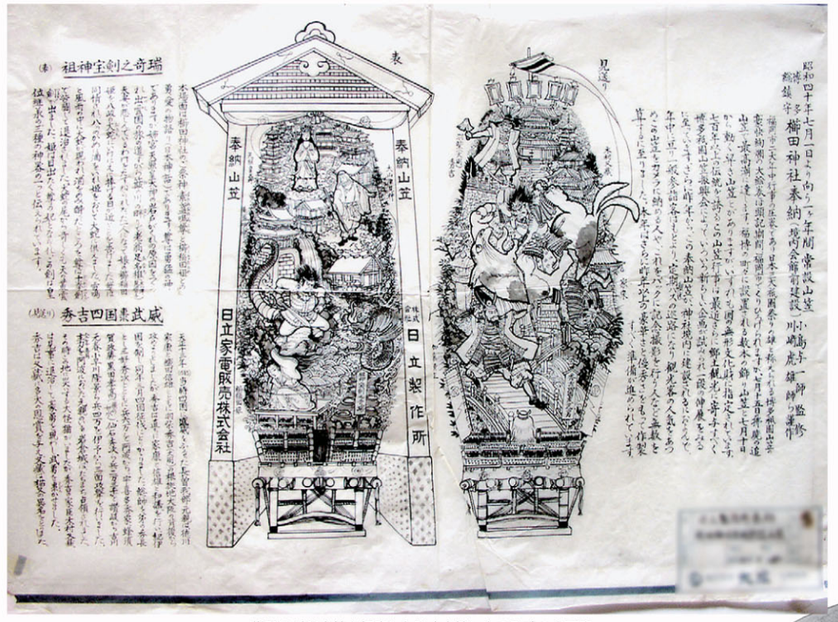
諭吉はプライベート面でも輝きを放っていた。若いころからのコンプレックスだったはげ頭を、ユーモアたっぷりに自慢し、社会を明るくしようとハゲまし合う「福岡光頭会」を50年に結成。頭の光り具合や色、形などを競うミスター光コンクールまで開催した。しかも入賞者の賞品は電球やゆでだこと遊び心全開。仁和加で人を笑わせるのが好きだった諭吉が発起人の一人となり57年に設立した「博多仁和加振興会」や「九州漫画家協会」でもユニークな企画・運営に取り組んだ。

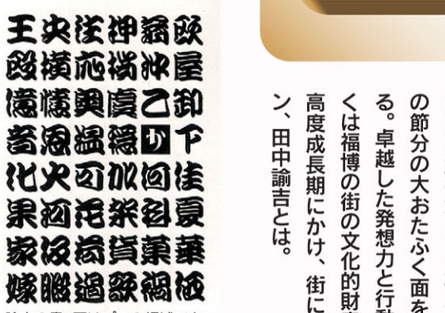
ある時友人が自分のことを「この人こそ無毛（形）文化財です」と人に紹介したのが気に入り、さらに「光頭」をプラスし、自ら「光頭無毛（荒唐無稽）文化財」と称するようになった。「有無庵（ユーモア）」と号した諭吉らしい話だ。

福岡光頭会の"頭光下の盟(ちかい)"

61年1月に新聞社を定年退職した諭吉はその後も広告代理店の西広、大広に勤め、博多の街の文化振興にも大きく貢献している。同2月には博多の総鎮守、櫛田神社の節分祭で、福が来ないならこちらから飛び込んでいこうという趣旨の「大おたふく面の福くぐり」などを発想。今でも節分になると同神社の入り口に大おたふく面が飾られ、多くの人がその口をくぐりお参りしている。

さらに諭吉は博多の祭りの代表といえる博多祇園山笠の新たな展開を模索した。迫力ある「舁（か）き山笠」を遠方に住んでいるなどの理由で見られない人のために、広い通りで日中にまとめて山笠を見物できるようにすることや、「飾り山笠」の常設を提案。伝統を重んじる山笠関係者に対し得意の書画を盛り込んだ入魂の趣意書を作り、粘り強く交渉しついに承諾をもらう。こうして62年に山笠が唯一那珂川を渡り福岡部まで走る「集団山見せ」が開始。2年後、櫛田神社境内に飾り山笠が一年を通じて公開されるようになった。


常設の飾り山笠を提案した諭吉自筆による入魂の企画書


諭吉の書、画はプロの領域であった（勘亭流作品）

素晴らしい発想力で、福博の町を元気にした田中諭吉

生き続けている企画が多数

西公園（福岡市中央区）にある光雲（てるも）神社のさい銭箱に硬貨をチャリンと入れると、天井に描かれた鶴が「クワァークワァー」と鳴くのをご存じ？　思わずもう一度投げ入れたくなるような気にさせるこの「謡（うた）い鶴」も諭吉が仕掛けたものだ。

福岡工業大学教授で、現在、超小型衛星（愛称・にわか衛星）を開発している田中卓史さんは諭吉の三男。「光雲神社の謡い鶴のアイデアは、弟が太宰府の戒壇院で合宿をしていて仏像の陰に隠れ、参拝客がさい銭箱にお金を入れるたびに、仏壇のかねをコーンと鳴らして遊んだのがヒント。鶴が鳴く仕組みを設計したのは、当時工学部の学生だった私です」と懐かしそうに語る。にわか衛星と名付けたユーモアは父親譲りか。

諭吉の最後の企画になったのが西公園近くにある荒津地区の町おこし「荒津まつり」。この打ち合わせ中に吐血し手術を受けたが、入院中も準備が気掛かりで病院を抜け出したという。入院から半年後の1970年9月5日、天国に旅立つ。69歳だった。

同今年の様子

福を自分で呼び込もうと発想した「大おたふく面の福くぐり」（櫛田神社1962年）

卓史さんの長女で福岡県人権研究所員の美帆さんは以前、福岡地方史研究会の機関誌に諭吉を取り上げた。「祖父が他界したのは私が生まれる9年前です。集団山見せや大おたふく面の福くぐりなど、死後も自分が手掛けたいろんなプランが生きているのは企画者冥利（みょうり）に尽きるのではないでしょうか」（文中敬称略）

諭吉の三男で光雲神社の「謡い鶴」を設計した卓史さんとその長女美帆さん

田中諭吉博多人形(西頭哲三郎作)

●参考文献
☆「企画奥の手」／田中諭吉著／積文館刊
☆「福岡地方史研究第43号」／福岡地方史研究会刊
☆「有無庵追憶」／マスプロ編／田中美沙緒・田中家一同刊
☆「田中諭吉ホームページ」（田中家作）http://tiara.cs.fit.ac.jp/~yukichi/　ほか

●このシリーズは、大きく変容している博多・福岡をいろいろなアングルで見直し、その魅力の源を〝深〟発見していくものです。次回のテーマは「修猷館物語」（3月下旬掲載予定）です。この企画へのご意見や取り上げてほしいテーマがあればお寄せください。

●宛先／〒810-8721　福岡市中央区天神1-4-1　西日本新聞社企画推進部「博学博多」係

太宰府天満宮「曲水の宴」も諭吉発

太宰府天満宮で、毎年3月の第1日曜日に行われる春の風物詩「曲水の宴」。梅の花の下、十二単（ひとえ）など平安時代の衣装に身を包んだ人たちが曲がった水路沿いに集う。流れてくる杯が自分の前を過ぎないうちに詩歌をつくる典雅な催しだ。

中国で始まったものだが、平安時代に天満宮でも行われた記録がある。1962（昭和37）年ごろ、諭吉は知り合いだった太宰府天満宮の禰宜（ねぎ）に「梅花の下で曲水の宴ばしたら風雅でよござすバイ」と持ち掛けたという。

諭吉の呼び掛けで、福岡の文化人をはじめ福岡風俗文化研究会や福岡美容師会などが協力し、63年から曲水の宴が始まった。このとき、「曲水の庭」の造園は、九州大学農学部の加藤退介教授が指導し、第一期の工事を終えたが、教授は謝礼を固辞し、そっくり初穂料として献上された。

諭吉が進行を務め、和歌朗詠を妻の美沙緒、娘は十二単を着て女官になり、息子が警固の衛士に扮（ふん）するなど、田中家のアルバムには、家族総出で諭吉の企画を盛り立てる姿が残る。

平安の昔をしのばせる「曲水の宴」（昨年）

〈企画・制作／西日本新聞社広告局〉